可笑しな二人

ポピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
可笑しな二人

【Ｎコード】
Ｎ２２１０Ｙ

【作者名】
ポピー

【あらすじ】
アニメポケットモンスターＤＰに登場するサトシ君とヒカリちゃんの８年後のお話です。拙い文章ですが、読んでいただくと幸いです。

プロローグ（前書き）

初めましてポピーと申します。宜しくお願い致します。まずはプロローグということで、サトシ君とヒカリちゃんは登場せず、オリジナルキャラクターを登場させて頂きました。

プロローグ

「ほう・・・」

私の前で長々と話をしていた初老の紳士はほうと一息つき目の前にある玄米茶に手を伸ばした。

「いやあ、実に面白い二人ですね」

私はお茶を飲んでいる紳士に声をかけたところ、ウタヘイハチロウ氏はお茶を置き、ニコニコしながら返答した。

「そうだろう。この二人は実に面白いのだよ。二人の側にいるとこっちも安らぐのだからね」

「でも、なぜ僕に話してくれたのですか」

売れない小説家である私のもとに面白い話があるからとウタヘイハチロウ氏が訪ねてきてから随分時間がたった。

ウタヘイハチロウ氏・・・

かつてはシンオウ警察の名捜査課長として数々の事件を解決してきた。氏と私はとある事件で知り合いになったのだが、それ以降久しぶりに氏がわたしの前に顔を出したのである。

「うむ、あの事件以来まだまだ君は三文小説家らしいからね。ここで、私が君に二人の話をしたのは二人のことを小説にして貰おうと思ってね」

「でも宜しいのですか。お二人とも有名人ですが・・・」

私が聞いた話に出てきた二人はこの世界ではとても有名な二人だったのである。マサラタウンのサトシとフタバタウンのヒカリは・・・

「なに、構うもんか。二人の許可はとってあるのだから。それよりもどうだい、書いてみる気はないかい。今や有名人の二人の話だ。幾らかは面白いと思うがね・・・如何かな」

ウタヘイハチロウ氏の問いに私は少し考える格好をした後に私ははっきりとした口調で氏に伝えた。

「そうですね。それではお二人の話。書かせていただきます。」

その話を聞いた氏はとても嬉しそうに笑いながら手を叩いた。

「よし！そうこなくては」

「それにつきましては、もう少しお話をお伺いしたいのですが・・・」

私がおずおずと尋ねると氏は

「勿論だ！何でも話そうじゃないか」

と元気よく返してくれた。

それからウタヘイハチロウ氏は何日間か私の家に来ては可笑しな二人の話をしていった。

氏の話を聞いて私が書いたものがこれから紹介する「可笑しな二人」である。

プロローグ（後書き）

これから少しずつ書き進めていく所存でございますので宜しくお願い致します。

師と弟子と（1）（前書き）

第一話です。実はヒカリちゃんはまだ登場しません。もう少しあとに登場致します。

あとタイトルがこの話だけだとわからないです。

拙い文章で色々間違いやおかしい部分も多いかと思いますが読んで頂けたら幸いです。

師と弟子と（1）

この日、ウタ氏はかつての友人の依頼でカントーのタマムシシティを訪れていた。
その友人の依頼というのは案外簡単なものであったため早々に解決し、友人宅を辞去し、タマムシシティ内を散歩していた。なんてことのない只の散歩である。天気は快晴で雲一つ無かったがタマムシシティだけあって空は澄みきっているわけではなかった。
そしてかつて母校であったタマムシ大学の正門前に着いたときに・・・

「む・・・」

ウタ氏は歩みを止めて正門から出てくる人物を見た。
年は恐らく１０代だろう。少し小柄ではあるが、何処と無く力強さを感じる。その彼の肩には黄色いねずみポケモン〝ピカチュウ〟を乗っけている。
ウタ氏は彼の姿を見たとたん笑みを深め大声で手をふり彼の名を呼んだ。

「サトシ君！」

大声で呼ばれたせいか彼は少し肩を震わせ此方を向いたが向いた途端に彼も笑みを浮かべて近づいてきた。

「先生！お久しぶりです！達者でしたか」

彼は元気よく挨拶をし、彼の挨拶が終ると肩のピカチュウもウタ氏に挨拶をした。

「うむ。久しぶりだな！見ての通り達者も達者だよ。少し白髪は増えたがね」

ウタ氏はサトシの手を握って言葉を返した。サトシもウタ氏の手を握り返して二人は互いの健康を喜んだ。

マサラタウンのサトシ・・・彼がこの物語の主人公である。

彼については少し語らなければならない。彼は僅か１１歳でポケモンリーグを制覇し、その三年後にはチャンピオンリーグで無敵とまで言われたチャンピオンマスター〝ワタル〟に勝利したものの、元来の旅好きで旅がしたいからという理由でチャンピオンマスターになることを辞退。その後各地に武者修行に出たが、現在では少し落ち着いたのか、かつて四天王の一人であったキクコがジムリーダーを勤めるトキワジムで師範代をしているのである。

さて、それは兎も角二人は二言三言話した後に再び歩き出した。

「いやあ、本当に奇遇ですね。どうしてカントーに」

サトシが尋ねるとウタ氏は頭を掻きながら答えた。

「いやね、昔の友人からすこし頼まれごとを依頼されてね。早く解決したものだから母校を見に来たんだよ。サトシ君はなんでまたタマムシに」

「オーキド博士のお使いで来たんですよ」

サトシがそう答えるとウタ氏はちょっ、と舌打ちをした。

「そうか。オーキドめ、自分が行きゃ良いものをわざわざサトシ君に頼んだのか。畜生めこりゃ少しとっちめるか」

ウタ氏の言葉にサトシは少し焦った。

「いやいや、博士も忙しい方ですから、いいんですよ。俺だって今日は暇でしたし・・・」

焦りながら必死に取り繕うサトシを見てウタ氏は思い切り笑った。

「あっはっは、冗談だよサトシ君冗談。」

この言葉を聞いてサトシはなんだ冗談かと、ほっと溜め息をついた。

「時にサトシ君。君此れからマサラタウンに帰るのかね」

「はい。そのつもりです」

「だったら私も行ってもいいかね。久しぶりにオーキドや君のお母さんにも会いたいし・・・キクコの婆さんにも会っときゃならんからな。どうかね」

ウタ氏の問いにサトシは笑みを一層深くして答えた。

「勿論ですとも！皆喜びます。是非！」

「そうかね。では宜しく頼むよ」

「はい！じゃあ、出てこい！リザードン！」

サトシはモンスターボールからかえんポケモン〝リザードン〟を出し背中に乗った。

「ボリス！」

ウタ氏もドラゴンポケモン〝カイリュー〟を出し背中に乗った。

「マサラタウンへ！」

二体のポケモンは同時に飛び立ち、マサラタウンへ向けて飛んでいった。

師と弟子と（1）（後書き）

第一話読んで頂いてありがとうございます。
さて、ウタヘイハチロウ（漢字だと宇田平八郎）とサトシ君は以前からの知り合いという感じです。サトシ君はウタ氏を先生と呼びます。二人の知り合ったきっかけはおいおい書いていきたいと思います。

１８歳のサトシ君ですが、少し小柄で童顔ですが力は強いしバトルも強いです。本人は小柄で童顔を気にしてる設定です。

タイトルについては物語が進むにつれて解るようにしたいと思います。

拙い文章ではございますが、ご感想宜しくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2210y/

可笑しな二人

2011年11月5日03時12分発行